

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 登録実用新案公報(U)

(11) 実用新案登録番号

実用新案登録第3135264号
(U3135264)

(45) 発行日 平成19年9月6日(2007.9.6)

(24) 登録日 平成19年8月15日(2007.8.15)

(51) Int.Cl.

A O 1 K 83/00 (2006.01)

F I

A O 1 K 83/00

Z

評価書の請求 未請求 請求項の数 2 O L (全 4 頁)

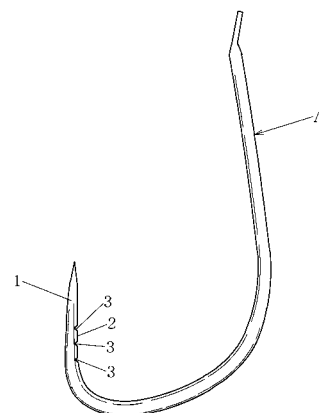
(21) 出願番号 実願2007-4924 (U2007-4924)
(22) 出願日 平成19年6月28日(2007.6.28)(73) 実用新案権者 595099041
株式会社土肥富
兵庫県加東市新定382番地の3
(74) 代理人 100103654
弁理士 藤田 邦彦
(74) 代理人 100118522
弁理士 藤田 典彦
(72) 考案者 土肥 芳郎
兵庫県加東市新定382番地の3 株式会
社土肥富内

(54) 【考案の名称】 釣針

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 釣魚に傷を付けないようにし、釣り損じするこ
とが少ない釣針を提供する。【解決手段】 針先部1における通常あごまたはもどりを
設けるべき付近2に、複数の溝3, 3を形成する。この
ようにすることで、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り
損じしないという、相反する要望を満たすことができる
。

【選択図】 図1



【実用新案登録請求の範囲】

【請求項 1】

針先部におけるあごまたはもどりを設けるべき付近に、複数の溝を形成したことを特徴とする釣針。

【請求項 2】

小さいサイズの針については、溝の数を少なくした請求項 1 記載の釣針。

【考案の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本考案は、いわゆるスレ針と称して針先部に通常の『あご』または『もどし（もどり）』が設けられていない釣針に関するものである。 10

【背景技術】

【0002】

近年、競技釣りが盛んで、いわゆるフィッシュ・アンド・リリースと称して、釣魚を釣った場所に戻すような習慣が定着しつつある。このような慣習を守るためには、釣魚に傷を付けないようにしなければならない。

【0003】

このような趣旨で考え出されたのがスレ針で、欧米でも早くから B A R B L E S S H O O K S と称され、鮭や鱒を釣るのに愛用されてきた。この針を使えば、釣魚に傷を付けることがなく、リリースしてやると元気に戻っていくので、上記慣習を守るのには最適な釣針であると言える。 20

【0004】

しかしながら、このスレ針を使用した場合には、慣れないと釣損じが起り得る。針先部に通常の『あご』または『もどし（もどし）』が設けられていないからである。それを解消するために、針先先端に近い軸部分に、ラセン状、又は X ラセン状、又はリング状に複数の溝を形成した釣針が提案されている（例えば、特許文献 1 参照）。

【0005】

【特許文献 1】登録実用新案第 3 0 2 6 0 5 2 号公報

【考案の開示】

【考案が解決しようとする課題】

30

【0006】

このようにすれば、釣り損じを解消することはできるであろうが、針軸全周にわたって溝が形成されているため、釣魚に傷を付けないという面では適しているとは言えない。

本考案は、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り損じしないという、相反する要望を満たすことができる最も理想的な釣針を提供することを目的とするものである。

【課題を解決するための手段】

【0007】

上記目的を達成するために、本考案においては、針先部におけるあごまたはもどりを設けるべき付近に、複数の溝を形成した。このようにすることで、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り損じしないという、相反する要望を満たすことができる。 40

【0008】

小さいサイズの針については、溝の数を少なくするとよい。例えば、比較的大きいサイズの針については、5 本程度の溝を形成し、小さいサイズの針については、3 本程度と溝の数を少なくするのがよい。このようにすることで、小さいサイズの針に対する溝形成加工も簡単に行うことができる。

【考案の効果】

【0009】

請求項 1 記載の考案によれば、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り損じしないという、相反する要望を満たすことができる。

【0010】

請求項2記載の考案によれば、小さいサイズの針に対する溝形成加工も簡単に行うことができる。

【考案を実施するための最良の形態】

【0011】

本考案による釣針の一例を、図面に基づいて詳細に説明する。図1に示すように、釣針Aの針先部1における通常『あご』または『もどり（もどし）』を設けるべき付近2に、複数の溝3、3が形成されている。このようにすることで、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り損じすることがない。この2つの要望は本来相反することであるが、上記構成とすることによって、この相反する要望を満たすことができる最も理想的な釣針を提供することができる。

10

【0012】

前記溝3は、出来るだけ細くて浅くすることが望ましい。そのようにした方が、釣魚により傷を付けないようにすることができるのみならず、溝3を太くかつ深く形成した場合よりも折れにくいからである。

【0013】

また、前記溝3の数は3～5本程度とするのが好ましく、小さいサイズの針については、溝の数を少なくするとよい。例えば、比較的大きいサイズの針については、5本程度の溝を形成し、小さいサイズの針については、3本程度と溝の数を少なくするのがよい。このようにすることで、小さいサイズの針に対する溝形成加工も簡単に行うことができる。

20

【0014】

このように、釣針Aの針先部1の通常『あご』または『もどり（もどし）』を設けるべき付近2に、複数の溝3を形成することにより、釣魚に傷を付けずに、しかも、釣り損じすることがない。

【0015】

なお、ここに示す例は本考案を実施するための最良の形態の一例であって、本考案の実施に際して、各部の形状は図示した態様の場合のみに限定されるものではなく、本考案の要旨に沿って種々の設計変更が可能である。

【図面の簡単な説明】

【0016】

30

【図1】本考案を実施するための最良の形態の一例を示す拡大側面図である。

【符号の説明】

【0017】

1…針先部、2…あごまたはもどりを設けるべき付近、3…溝、A…釣針。

【図 1】

